

【書 評】

球技のコーチング学

(日本コーチング学会編集, 大修館書店, 2019年, 336頁, 2700円+税)

谷釜尋徳¹⁾
Hironori Tanigama

本書『球技のコーチング学』は日本コーチング学会によって上梓された。同学会が手掛けた『コーチング学への招待』(2017年, 大修館書店)に続く第2弾である。対象を「球技」に絞り込み, その指導にまつわる事柄を「コーチング学」という学問領域の中で捉えようとする本書は, 日本バスケットボール学会の会員各位にも紹介するに足る内容を数多く含んでいると思い, この書評を投稿させていただいた。

部・章レベルまでの目次構成は下記の通りである。第1部では球技を対象とするコーチング学の一般理論がふんだんに記述され, 続く第2部では指導現場におけるコーチの行動が学術的なバックグラウンドを踏まえて丁寧に語られている。まさに「研究」と「現場」を往還できるような内容であろう。

〔目次構成〕

第1部 球技のコーチングに関する一般理論

- 第1章 球技の特徴
- 第2章 球技におけるゲームの特徴
- 第3章 球技における競技力の構造
- 第4章 球技におけるパフォーマンスの分析
- 第5章 球技におけるトレーニングの原則

第2部 球技における合理的なコーチング活動に必要な思考や能力

- 第6章 球技における競技力の養成
- 第7章 試合への準備
- 第8章 試合における指揮
- 第9章 球技におけるチームマネジメント

このうち, 評者の個人的な興味関心を大いに刺激したのは, 第1部「球技のコーチングに関する一般理論」

である。自身の理解が乏しいことを棚上げすれば, 本書を拝読しながら, 『序説運動学』(1968年, 岸野雄三ほか編著, 大修館書店)が思い浮かんだ。『序説運動学』はマイネルの「運動学」を日本国内に問うた最初の書物として知られ, 広くスポーツの「運動」を対象とした一般理論が集約されている。一方, 『球技のコーチング学』にしても, 「球技」という対象にフォーカスし, その共通項を丹念に拾い上げて理論的に一般化していく仕掛けがあるように思えたからである。(的外れであればご容赦願いたい)

こうした観点から本書を読み進めると, バスケットボールという種目別の特性を相対化するヒントがそこかしこに散らばっているばかりか, 多様な球技を串刺しにするような構造も見出されていることに気がつく。

もちろん, 本書は「コーチング」に特化したものであるが, 例えばスポーツの歴史学(評者の専門分野)的な研究に置き換えてみても, こうした横断的かつ総合的な視点は有効に作用する。「バスケットボール学とは何か?」を知りたいと思うあまり, ともすれば蜻蛉壺に陥りがちな評者にとって, 時には種目別の壁を飛び越えて他の球技を覗き見することの大切さを再確認するきっかけともなった。

「バスケットボール学」への理解を深めようとするならば, 本書のように「球技」というマクロな視点から当該学問を見つめ直す作業が不可欠である, と書けば, 本誌『バスケットボール研究』の読者からお叱りを受けるだろうか。かくいう評者も, 本書を繰り返して読んで「球技」, そして「バスケットボール」への理解を深めたい。

ここでは, 評者の実力不足から, 本書が提供する深遠なる世界の一部分にしか触れられなかったが, 詳細

1) 東洋大学法学部
Faculty of Law, Toyo University

は本書を手にとってご確認いただきたい。
とにもかくにも、読みごたえのある一冊である。